

古見の結願祭と狂言

波照間 永 吉

一、古見の結願祭の儀礼過程

結願祭は、八重山では一般にキチガン、キチゴンなどと称され、1年の願の成就を神に感謝し、この1年にかけての諸願を解くための祭祀である。と同時に、来る年の豊穰を祈願する祭りとしての性格も付与されているように受け止められている。なかには石垣市登野城の例のように、12年ごとに行われる地域もあるが、それは後の変改であって、本来的には毎年行われるべきものであった、と思われる。

古見の結願祭はかつては、旧暦6月のプーリィ(豊年祭)、同10月のシチィ(節祭)、同12月のタナドゥリィ(種子取り祭)などとならぶ、村をあげての大きな祭礼であった。しかし、近年は村の過疎化が主因となって、1984年から1991年の8ヵ年間の奉納芸能の中断に端的にみられるように、往時の盛大さはみられなくなっている。ただ、この8年間の中断の際にも神女の御嶽での祭祀だけは執り行われ、結願祭そのものは続けられている。

古見の結願祭は旧暦2月のユーニンガイ(世願い=豊穰祈願祭)とセットになっており、ユーニンガイが行われると結願祭も確実に行われなければならないとされている。ミジィニ(水の兄)の日に始まり、金の日を終了するという。1993年の結願祭は10月10日に行われたが、この日はキヌトゥ(木の弟)にあたっていたという。郷友会の参加のための日程調整の結果である。結願祭の変容の一つの具体面である。

古見の結願祭は、まず神女・チカサのウツカン(御嶽)での祈願から始まる。結願祭当日の朝、8時過ぎにピニシィウツカンのチカサを勤める仲本セツさん宅に村の神女(現在神女のいない御嶽ではティジィリィビと称される男性神職)が集まる。一同が参集したところで、御嶽の祭祀で供えられる供物(ハナグミ=花米、ミシャグ=神酒、グシィ=泡盛の神酒、カウ=線

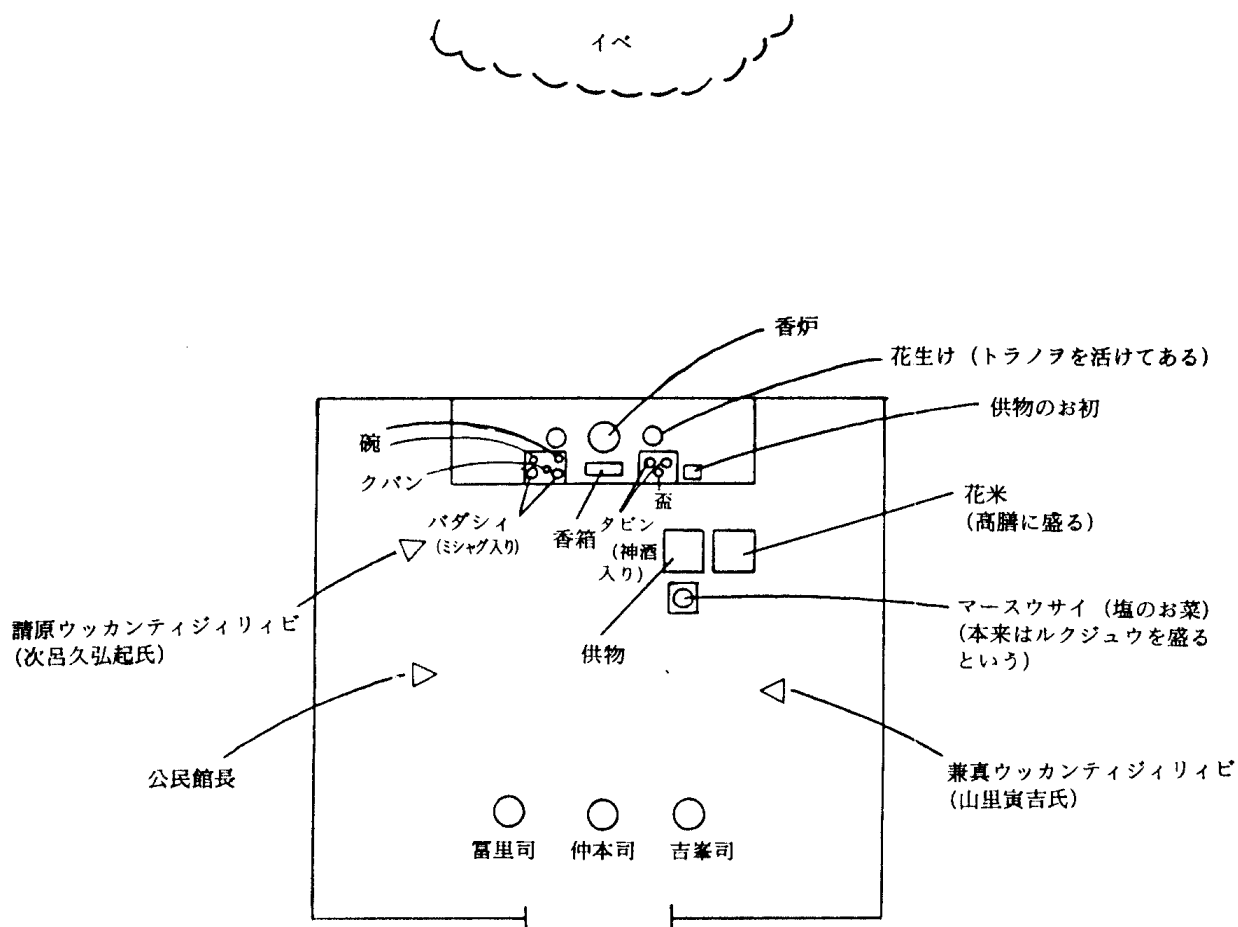
香など) が配られる。その後、一同で結願祭を迎えた果報を喜びあい、来る年の豊穰を祈る挨拶を取り交わす。この時は、まず、村の神女で一番の年長者で、指導的な立場にある富里サカイさんがウカウッカン（請原御嶽）の男性神職者で、村の諸祭祀で中心的役割を担っている次呂久弘起氏に向かい上記の趣旨のことばを述べ、次いで次呂久氏が神女らの一年の働きに対しお礼を述べ、来年の豊穰を祈っている旨の返礼の言葉を述べる。

仲本家でのこの儀礼がすむと神女たちは自分の家に戻り、それぞれが齋く御嶽での祭祀のための準備を整え、すぐに御嶽へ向かう。御嶽に入るとウッカンヤ（拝み屋）に上がり、供物の包みを神棚の上において、簡単に合掌したあとウッカンヤ内部の清掃をする。清掃をおえると、神棚の香炉の清め、花生けの水の交換などをおえたのち、供物を神棚に配置する。そこで神女は神衣装を着け、結願祭の神祈願・拝礼を行う。キダスクウッカン（慶田城御嶽）の富里サカイ神女とピニシィウッカン（平西御嶽）の仲本セツ神女は同一のウッカンヤ内にそれぞれの御嶽の神棚を設けているため、それぞれの御嶽の神への拝礼がすむと、互いに向かい合い、結願祭を迎えた村の豊穰を喜び、来る年も豊穰であってほしいという旨の口上を述べあう。そしてそれぞれの御嶽の神棚に備えたミシャグ、グシィのおながれを交換して飲む。この時も富里神女の方が先で、仲本神女は後になる。

御嶽での祭祀はこれで終了となり（午前10時頃）、神女たちは自宅に戻る。

結願祭の芸能の奉納はウカウッカン（請原御嶽）の神庭を舞台に行われる。12時前に各御嶽の神女らがウカウッカンのウッカンヤに上がり着席すると、ウカウッカンのティジィリィビの次呂久弘起氏は祈願の準備にとりかかる。神女らが白い神衣装をつけ、拝礼の準備がととのったところで、一同でウカウッカンの神棚に向かって拝礼・祈願の儀礼を行う。この後、公民館長がウッカンヤに入り、供物の料理を開き神棚の前の床に配列する。その後ティジィリィビと公民館長らの男衆がユーパイ（四拝。四立五屈の拝礼）の拝礼を行う。その後神女、男性神職ほか男衆もそろって一同で拝礼を行う。これで御嶽の神への拝礼は終わり、公民館長より神棚にお供えした供物のグシィのおながれと健康を象徴するマースウサイ（真塩お菜）がまわされる。この時、次呂久弘起氏よりカニマウッカン（兼真御嶽）のティジィリィビである山里

寅吉氏へ、結願祭を迎えた喜びと来る年の豊穰を願う趣旨の口上が述べられ、山里氏も同趣旨の返礼の口上を述べる。次いで山里氏と公民館長の間でも同じ儀礼が行われる。その後、一同は互いに向かい合い、上記の趣旨の挨拶を行う。これが済むと神棚の前に供えられた供物の料理のハチィ（お初）が小皿に取り分けられ、先ず神棚に供えられ、一同にも振る舞われる。ここから、一同、歓談となる。（図1参照）。



<図1 請原御嶽での祭儀の時の座図>

12時30分頃、奉納芸能が始まる。先ずは奉納芸能の演者一同がミルク節、ヤーラーヨー節の音曲に合わせ、御嶽の神庭に入場する（一般にスナイといわれる）。するとすぐに、イヤー、イヤーの掛け声で棒術の一同がミナカ（神庭）に入り、ミナカを一巡する。そのあとミナカで棒術の芸能が演じられる。棒術の芸能は二人一組で、ティンバイ、三尺棒、三尺棒と槍、三尺棒と薙刀、一同揃っての各組での打ち合い、その後、左右の位置を変えて再び上記の演

技が繰り返され、終了となる。

ミナカの芸能の棒術がおわると、舞台の芸能となる。舞台での芸能は、先ずザーピラキィ（座開き）として「カギヤデフウ」が演じられる。次いで長老夫婦（ンヌ）とその子孫の一同（ファーマー）が登場し、御嶽の神に芸能を演じ、奉納するという劇仕立ての「長者」となる。その後、次々に芸能が演じられるが、その演目は「ゆがふ口説」（舞踊）、「カザク（鍛冶工）狂言」「恩納節」「鶴亀節」「古見の浦節」（以上、舞踊）、「ターカイシ（田耕）狂言」（狂言）、「かせかけ」（舞踊）、「亀組」（狂言）と続き、最後は御嶽のミナカでの二頭の獅子による「獅子舞」で終了となる。（1993年の演目）。

芸能が終了すると、すぐに後片付けとなり、ウッカンヤーに着座していた神女や男性神職者らも解散となる。その後、ミナカでくるま座となって、古見に住む人々と石垣市などに住む郷友会の人々で歓談して時を過ごす。

二、結願祭の狂言

古見の結願祭の奉納芸能の舞台・サンシィキィ（「棧敷」の意）は、ウカウッカンのウッカンヤーに向けて設えられるが、沖縄各地にみられるバンク（舞台）のように地面から高く持ち上げる形式ではなく、十数センチの高さのブロックを土台としてその上に畳を敷いたものである。舞台の後背部は幕で仕切られ、後方はブドゥリザー（踊り座）と称され、楽屋に相当する空間である。幕のすぐ後ろには机、腰掛け、音響施設がセットされ、ディーピトゥ（地謡いの人＝音曲担当者）の席が設けられている。ミナカには筵やビニールカバーの敷物が敷かれ、村人の見物席となっている。（図2参照）。

以下、本節では、古見の結願祭の芸能のうちリーヌキョンギン（例の狂言）と称される芸能についてその概要を記述する。

古見の結願祭のリーヌキョンギンとして現在演じられているのは、「長者」（ンヌマーファーマー）、「ターカイシ」（田耕し）、「カザク」（鍛冶工）、「カミクミ」（亀組）の4番である。そのうち「長者」と「カザク」は八重山の他の地域でも演じられているが、「ターカイシ」と「カミクミ」は古見固有のキョンギンである。

1) 「長者」

「長者」は沖縄各地の村芝居で行われる「長者の大主」系統の芸能である。長寿と富貴万福の長者夫婦が、我身の幸福を村の神に感謝して、一緒に登場した子孫に様々な芸能を演じさせ、奉納させるものである。

長者の扮装は黒朝衣にミンサーの帯を締め、頭は黒い布の被り物で覆う。眉は白糸のつくり物を付け、頬および鼻下そして顎から長い白髭（前屈みになると帯のあたりまで垂れる）をつける。黒足袋をはく。右手には金色の扇子を広げ持ち、左手には杖をついて、前屈みの状態で所作を行う。媼は、小さな文様を染めた紅型衣装を打ち掛けにつけ、白足袋を履く。頭には老婆風に、マーニ（クログ）のシュロ毛の繊維で作ったかつらをつける。子孫たちは自分の演ずる芸能の扮装のまま登場する。

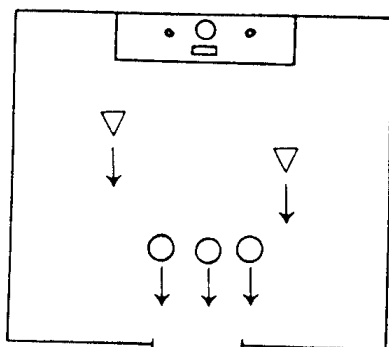
下手から登場した長者とその子孫一同は舞台を一巡し、長者夫婦は下手手前で椅子に腰掛ける。子孫は幕の前に横一列に並んで着座する。先ず長者が一同の者に芸能を演じ、奉納するよう指図すると、最初に「御前風」が踊られる。子孫の芸能の披露に対し、長者は「ユーシャン クワンマグヌチャー」（でかした、子や孫たちよ）と賞賛の辞をかける。そして又、子孫の者に芸能を披露するように命じると、年下の子孫から舞台に出て踊る。このパターンで長者の子孫全員の芸能が展開されるのである。「長者」で奉納される舞踊・狂言は以下の通りである。「御前風」「ナチジン(今帰仁)」「ミンヨウミン(耳よ耳)」「テンヨー」「馬節」「イシャドーネ」「マンガニスツツァ」「シヨンカネー」「一番狂言」「二番狂言」「バーチ(おばさん)」。これらが終了すると長者夫婦と子孫一同は舞台を一巡して下手から下がる。

2) カザク（鍛冶工）

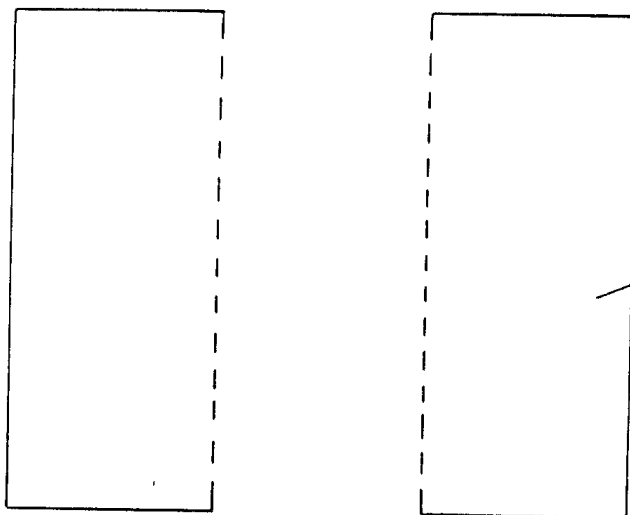
農作物の豊穰を予祝する狂言である。しかし、直接そのことをいうのではなく、農作業のための道具が如何に立派に作られたかを言うことで、それをなすのである。

カザクは竹富島の種子取り祭で演じられるのが有名であるが、古見と小浜島でも結願祭の「例の狂言」として演じられている。竹富、古見、小浜の「カザク」は、内容的には同一である。しかし、古見と竹富のものを比較してみると、劇中、鍛冶工が述べる「カザリグチィ」（飾り口。鍛冶神への祈願の言

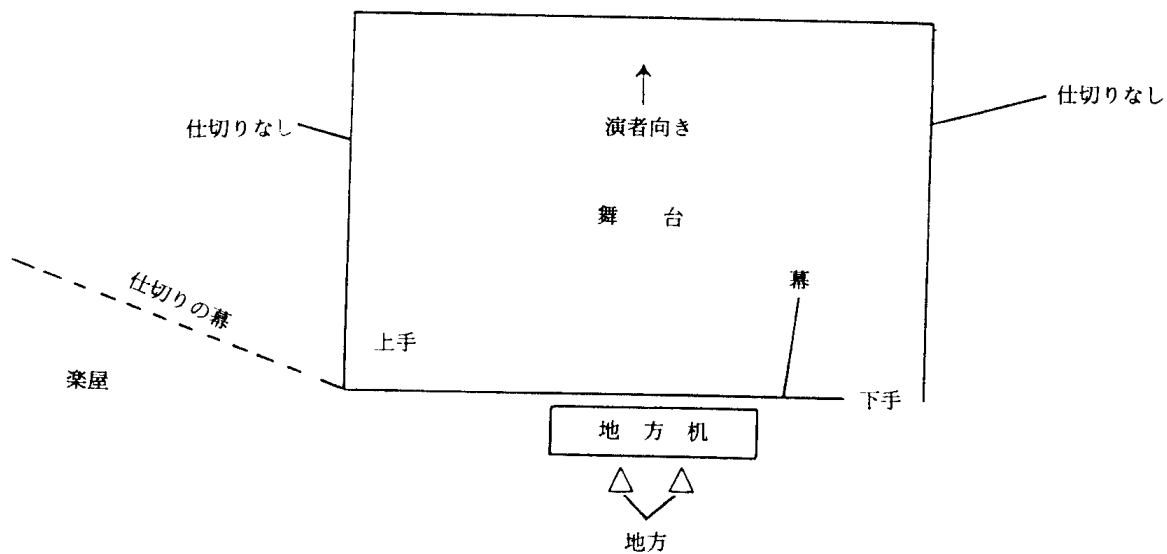
いべり



給仕準備所
間垣



村人座席
(筵敷)
* 奉納芸能の冒頭のスナイ
と棒術、末尾のシーシー
パーシーの時は撤去される



<図2 請原御嶽での奉納芸能の時の配置図>

葉)が竹富のものに比べると短くなっている点。竹富のものには見られない、後述の、滑稽を狙った加那と祖良のやりとりがある点。竹富のものが歌を劇中で歌うのに対し、古見のものにはそれが無い点など、幾つかの異同も見られる。古見の「カザク」は古見の方言で演じられる「島狂言」^(注1)である。

登場人物の扮装は、鍛冶工と伊武戸は黒朝衣に黒い帯を締め、黒足袋を履いて登場する。その下役の加那と祖良は最初から白ズボン(ステテコ)、白襦袢にミンサーの帯を締め、水色の布でたすきを掛け、日本手拭いで「上げ結び」^(注2)(むこう鉢巻き)に鉢巻きを締める。足は白黒縦格子の脚絆を巻き、黒足袋を履く。1人はふいごを担ぎ、1人は鉄槌を担いで登場する。劇の途中から鍛冶工と伊武戸は着物を取り、白ズボン(ステテコ)に白襦袢、ミンサーの帯を締め、たすき掛け、黒足袋の衣装となる。

狂言の内容は、仕事(農作業)を割り当てられた伊武戸が、道具が少ないので、鍛冶工に新たに道具を作ってもらおうようお願いするところから始まる。鍛冶工は伊武戸の頼みに応じ、伊武戸とその下役の加那と祖良を引き連れ、鍛冶にとりかかる。先ず始めに鍛冶場を清掃し、鍛冶の神にカザリグチイを唱え上げる。一同で神にお供えした神酒のおながれを戴いて、それから作業にとりかかる。途中、鍛冶工と伊武戸、加那、祖良とのやりとりがある。そして、無事に鍛冶を終えて帰途につくというものである。

この狂言は「例の狂言」であるが、滑稽味を前面に出したものとなっている。そのなかでも、鍛冶工が打ち上げたばかりの鍬を伊武戸の手に渡し、伊武戸が火傷をして鍛冶工の両の耳をつかまえる部分と、見事に打ち上がった道具を讃えて、加那が「この道具であれば、2、3日もかかる仕事でも1日で終わる」といったのを受けて、同様に道具を讃えようとした祖良が「この道具であれば、1日で終わる仕事も2、3日掛かる」と逆に言い違えて、鍛冶工に叱られるところが、この狂言の笑いのポイントとなっている。

3) ターカイシ(田耕し)

ターカイシは古見独自のキョンギンで、結願祭のみに演じられるものである。登場人物は、村の総代役とその使いの者3人(カマダー、ツクリャー、マツァー)である。

総代の扮装は、黒地の着物に帯をしめた平服である。一方、使いの者の3

人は、白ズボンに白いシャツを着け、紫色の布でタスキを掛ける。頭には日本手拭いでむこう鉢巻きを締め、脚には前記の脚絆を巻く。

セリフは古見の方言で、日常会話と同じように語られる。いわゆる「島狂言」である。

狂言の内容は、村の総代が使いの者3人を呼んで、自分の田の荒打ちをさせる。初めは真面目に働いていたが、そのうちに2人の者はなんののかんのかんといっけ、昼寝を決め込んでしまう。それでも真面目に働いていた1人が、田の中から金塊を掘り当てる。怠け者の2人が自分たちにも分け前があるべきと主張したため、3人は総代に決着をつけてもらうよう申し出る。事情を聞いた総代は3人のうちで1番歳かさの者がこの金塊の所有者とするという。それぞれ自分が歳かさであることを言うために、マツアーは、自分はこの村が茶碗一つにも満たない時から生まれている者だという。これに対しツクリヤーは、自分はこの島の天と地とがまだ分かれないう時から生まれているのだという。最後に返答することとなった、真面目に働いていたカマダーは、自分の嫡子はこの2人の者と同じ年だと答える。そこで総代は、カマダーが最年長だとして、金塊をカマダーに渡す。怠け者の2人は幸運を逃した腹いせに、互いに罵りながら下がっていく、というものである。

4) カミクミ (亀組)

「亀組」は古見の結願祭の舞台の芸能の最終演目で、古見にしか伝承されていない。登場人物は武人の扮装をした「頭大王」(男性)1人と、海底の他界の「女神」1人の、2人だけである。

「亀組」は全体が組踊の影響の下に成り立っており、古見地生えのものではないことを推測させるが、これが何処から入り、何時頃から上演されたかは不明である。周辺の村に類似の芸能はなく、貴重である。さらにこの狂言は内容的にも、沖縄の伝統的かつ固有の観念であるニライカナイの豊穡他界観を見事に表現しており、この点でも注目される。

頭大主は、釣りへ赴く態で、青布(風呂敷様)の被り物で頭を覆い、紫のナガサジ(長手巾)を鉢巻きとして締め(鉢巻きは腰まで垂れている)、額には金色の鍬形の飾り物(長さ約25センチ)を付け、両こめかみから左右の胸先まで赤色の長方形の布を垂らす。黒色の着物を着流しにつけ、右肩を脱い

で下着の白襦袢をみせ、その上から赤色の幅広の布でたすきをかけている。着物の裾は、腰のあたりで左右をつまみたくし上げて、あずまからげ風にし、白黒縦縞の脚絆がみえるようにする。黒足袋を履く。右肩に釣り竿（長さ約120センチ）をかけ、右手で支える。腰には大刀一本を差し、柄を左手で押さえた恰好で登場する。

ニライの女神は、頭飾りは八重山の女踊り一般の飾り物であるチィヂィバナ（頂花）、マイカンガン（前鏡）、スババナ（側花）、バサラ、チィユダマ（露玉）、ナミカンザシィ（波髪差し）などを付けて出る。鉢巻きは赤色のナガサジ（長手巾）である。衣服は、下に市松模様の着物を着け、その上に紅型の打ち掛けをウシンチーで着けるが、右肩は脱いでいる。足には白足袋を履く。劇の展開のなかで、五穀の種子の入った籠を両手に捧げ持つ。

セリフは全て、沖縄各地で演じられる組踊の唱えのように詠じられる。

狂言の内容は、頭大主がうららかな好天にさそわれ、魚釣りに浜に出て釣り糸を垂れる。すると当たりがあって、大きな魚がかかったと思い竿を上げてみると、それは魚ではなく亀であった。釣り上げられた亀は女に変化し、自分はこの世の者ではなく、海底の他界（ニライ）の神だと述べる。そして女神は、人間の世界に豊穰をもたらすためにやってきたという。頭大主は喜んで、女神に向かい合い、女神が捧げ持つ五穀の種子の入った籠をいただいて、村へ帰る、というものである。

以下、舞台上の展開を記す。三線と締め太鼓の演奏（組踊の手ごとに類する）で頭大主登場。そして「ディョウチャルムヌヤ（出てきたる者は）」と組踊冒頭の名乗りで、自らが「頭大主」であることをつけ、「今日の良き日に釣りをする」と述べる。再び三線と締め太鼓の演奏で舞台中央へ移動する。この時、足運びは、右に一步大きく踏み出し、次いで左足を右足の方へ運ぶという形で、これを左右交互に行う。従って歩行線はジグザグ型となる。舞台中央に到ったところで、男は釣り糸を幕（上手側）の方へ投げる。するとすぐに当たりがあり、幕（上手側）から五穀の種子の入った籠を両手に捧げた女神が出てくる。男が何者であるかと問うと、女神は自分こそが豊穰の国なるニラヤ（ニライカナイ）の神であることを告げ、これから人間界に豊穰をもたらすところであったと語る。頭大主は畏まり、女神の捧げ持つ五穀の種

子の入った籠をいただき、正面になおり「ウートトウ」（おお、尊い）と感謝の言葉を述べ、再び女神と向かい合う。女神は頭大主に対し、稲の栽培法を教え、生産に励み、首里の国王への貢納を立派に勤めるようにと諭す。頭大主は再び正面に向き、早く村に戻り、この果報を皆にしらせよう、と述べる。そして、三線の伴奏にのせて歌われる「伊計離節」にあわせ、女は舞台を上手から下手へ手踊りをしながら回り、退場する。頭大主は籠を捧げた姿勢で、途中まではその女神を案内するように先に立ち、後は女神に付き従うように後ろになって退場する。

○「伊計離節」歌詞

- | | | | | | |
|---|--------|--------|--------|--------|-------|
| 1 | みりくゆぬ | ヨーハーリ | 弥勒世の | ヨーハーリ | |
| | なうるゆぬ | ヨーハイヤー | 稔る世の | ヨーハイヤー | |
| | ぬしいでむぬ | | 主であるから | | |
| 2 | きゆぬ | ひぬ | ヨーハーリ | 今日の日の | ヨーハーリ |
| | くがにひぬ | ヨーハイヤー | 黄金日の | ヨーハイヤー | |
| | まさる | ひに | 勝る日に | | |

三、古見の結願祭の組織

現在の古見の結願祭の芸能の組織は、ディーピトウ（地謡いの人＝音曲担当者・男性）3～4人、ブドゥリィザー（踊り座）の人やキョーゲン（狂言）座の人男女十数人、棒術の演者8人（男性）とジンバイ（膳配り＝給仕役・男性）といったものである。以前はクバンガカリ（神饌係）もあったという。これらの諸役は、年令階層によって分担されていたが、現在は村の人口が減少したため、小学校入学前の幼児から小・中・高校の児童生徒を始め、村の小学校に赴任している先生、郷友会の会員およびその子弟も加わって運営されている。

結願祭の芸能の稽古は祭りの10日程前より手がけられるが、祭りの前日は、公民館に集まり、シクミ（仕込み。リハーサルに相当する）が午後4時頃より行われる。芸能の指導は村の指導的立場にある年配者や先輩格の者が当たる。結願祭の開催費用は村の公費から支出される。芸能に要する部分も同

じである。石垣市の郷友会などでの芸能の稽古などに関する経費は郷友会の補助の他、個人の負担もある。古見の年中行事のうちの大きなものは、石垣市他の郷友会の人的・物的な援助なしには遂行が困難な状態にあるが、結願祭に関わる諸芸能の実演についても同様である。

四、結願祭の狂言資料

ここに紹介する狂言の詞章は、古見出身の大底朝要氏の「古見の狂言」を土台としている。本文書は古見の結願祭でリーヌキョンギンとして演じられる上記4番の狂言の詞章を記した手書きの文書(草稿)である。本稿の形は、同書の詞章を大底氏の朗唱した詞章と大底氏の指示によって部分修正したものである。同書はカタカナをベースに一部漢字を用いているが、本稿ではカタカナの部分のみをひらがなに置き換えた。また、宛て字や送りがななど、大底氏の「古見の狂言」を一部改めた部分がある。なお、本稿の詞章原文の部の()内は、「古見の狂言」ではルビとして示されたものである。訳は大底氏からの聞き取りに基づいて筆者が新たにつけたものである。各狂言の末尾に大底氏から聞き取りに従って簡単な語注を付けた。中舌音の表記は大底氏の稿本に従った。狂言詞章の音声表記は、上記「古見の狂言」を大底氏に朗読してもらったものをおこしたものである。「古見の狂言」の詞章と音声表記の詞章との間にある異同については、〈付記〉をご覧ください。

1) 長者

長者	我みや くぬ村 百二十歳(ひやく [wamija kunumura çakuhatatji はたち)なる naru	私はこの村の百二十歳に なる
	長者(ちょうじゃ)ぬ うふ tjo:dzanu ?uΦu:	長者の大〔主〕
	ありがた 我 とうじぶとう ?arigata wa: tudzibutu	有難くも 我が夫婦は

どーがふゆ 給ぼーてい do:gaΦu:ju tabo:ti	健康の果報を戴いて
まんまんぬ しでいがふーだやーびる mammamnu ſidigaΦu: daja:biru	万々の至福でございます
今日ぬ ゆかる 日に kju:nu jukane çini	今日の良き日に
今日ぬ まさる 日に kju:nu masaru çini	今日の勝る日に
子孫(くわんまぐわ)ぬ達(ちゃー) kkwammaganutſa:	子や孫達を
ひきちりてい hikitſiriti	引き連れて
踊いはに しみてい wuduihani ſimiti	踊り跳ねさせて
願い 叶わたる うふび① nigai kanawataru ?uΦupi	願いが叶ったウフピを
あぎやびん ?agijabin	上げます
又 願ゆしや mata nigajuſija	又 願いますことは
つちまさい② まさい tsutſimasai masai	土(又は年か)勝りに勝り
年貢(にんぐ) とうしあまてい③ ningu tuſi ?amati	年貢も年(?)に余って
家敷(やしち)ぬ すごい④ jaſitſinu sugo:i	屋敷の優れ(?)
しら⑤ まちん⑥ んしる⑦ ſira matſiŋ ŋſiru	稲叢の真積みも据える
う願(にげー)だやーびる ?unige: daja:biru	お願いでございます
まんまんぬ しでいがふーだやびる mammannu ſidigaΦu: dajabiru	万々の至福でございます。
うーとーとう うーとーとう ?u: to:tu ?u: to:tu}	おお 尊 おお 尊

——腰掛けてから——

長者婦人 あーとーとう あーとーとう
[ʔa: to:tu ʔa: to:tu]

ああ尊 ああ尊

子孫(くわんまぐわ)ぬちゃー
[kkwa mmaganu tʃa:

子や孫達よ

踊いはに しみてい
wuduihani ʃimiti

踊り跳ねさせて(して)

祝(ゆえー)しち あすび
ʔjuwe: ʃitʃi ʔasubi]

祝いして 遊べ

——子供達ノ踊り終エテ——

子孫ぬちゃ 宿に
[kkwammaganutʃa: jaduni

子や孫達よ 宿に

立ち戻てい
tatʃimuduti

戻って

祝しち 遊ば
ʔjuwe: ʃitʃi ʔaʃiba]

祝いして 遊ぼう

〔語注〕

①うふびー未詳語。②つちー年か、という。③とうしー未詳語。④すごいー優れか。「年貢を納め、余ったのが屋敷の周囲一杯に」という意、とされる。⑤しらー稲叢。稲を収穫した後、屋敷内に円錐状に積み上げたもの。⑥まちなー真積み。稲を積み上げた物。沖縄諸島の方言でいうイニマゲン。⑦んしるー据える。設える。

2) 加治工 (かざく)

伊武戸 我(ばん)どう 東大底家(あーる
すきや)ぬ①
[bandu ʔa:rusukijanu

私が東大底家の

伊武戸ゆ
ʔintuju,

伊武戸です

今日から また しくんがい②
kju:kara mata ʃikungai

今日からまた仕事を

くばらりぶるぬどう③
kubarariburundu,

配られておりますが

考いみりばー ばー ていでいよ④ kangaimiriba: ba: tidijo:	考えてみれば 私としては
道具(どうんぐ) 少(すく)なは ありぶりどう dungu sukunaha:riburidu,	道具が少なく ありますので(少ないので)
加治工(かざく)ば みり⑤ kazakuba miri	鍛冶工を見て(会って)
道具ぬ ふついば うつあしみ dungunu Φutsiba ?utsašimi	道具の口を打たせて
なーてい⑥かつ⑦ かつみしみ na: tikatsi katsimišimi	銘々に持たせて
いでい立つ すずんどうん⑧ やっ ていら⑨ ?iditatsu suzundug jattira,	(田畑に)出ることができたら
人並(びとうなみ)に しーぱらりる んがやー⑩でい pitunamini šiparari:rungaja:di	人並みにやっっていけるの では
思いどう かい あらぐゆ ?umuidu kai ?arugju]	とあって この様に歩いてい ます。
——幕内に向かい呼びかける——	
しじゃ しじゃ [šidza: šidza:]	先輩 先輩
——幕内から——	
加治工 えー⑪ ぬーでい かい⑫ あるぎゃ [?e: nu:di kai ?arugja,	おう。どうしてこの様に歩い ているのか。
内(うつ)んかい 入(び)りくわ ?utsiŋja: pi:rikwa:]	内に入って来い
伊武戸 おー くゆなら しじゃ [?o: kujunara šidza]	はい。御免ください先輩
加治工 んーみしゃんさ⑬ [?m: mišansa:,	ああ。元気だろうな。
ぬーでい かい あるぎゃ 伊武 戸(いんとう) nu:di kai ?arugja ?intu:]	どうしてこうしているのか伊 武戸

伊武戸	おー さーてい かいどう④ くーさ [?o: sɑ:ti kaidu kusa しじゃ ʃidʒa:]	はい。このような訳で来ま した 先輩。
加治工	んー [?m:]	そうか
伊武戸	今日(きゅー)から また [kju:kara mata しくんがい くばらりぶるぬどう ʃikungai kubarariburunudu, 考(かんが)いみりば kangai miriba 我(ば)ていでいよ ba ti:dijo: 道具(どうんぐ) 少なは ありぶり どう dungu sukunaha: ariburidu, 道具(どうんぐ)ぬ ふつば うちた ぶりでい dungunu Φutsiba ?utʃitaburidi 来さ しじゃ ku:sa: ʃidʒa:]	今日からまた 仕事を配られていますか 考えてみると 私としては 道具が少ないので 道具の口を打って下さいと 来たのです 先輩
加治工	んー あいどう やっすぬ⑤ [?m: ?aidu jassunu, ばな 人数(にんじゅ)でいよー ba: nindzudijo: 朝(すとうんでい)な なー ぼー ぼー⑥ ʃitundina: na: po:po: 手配(ていっばい)し ぱらしきしし てい⑦ tippaiʃi: paraçikiʃiʃiti, 我(ばん)とう 新本家(あんでや)ぬ bantu ?andijanu	ああ そうだったのか 私の手下達は 早朝に銘々方々へ(散って) 手配して行ってしまっ 私と新本家の

	加那(かな)とうどう ka:na:tudu	加那とが
	いい ¹⁸ 持(む)つ 人(びとう)でい ʔi: mutsɨ pitudi	飯運び人として
	残(ぬく)りぶる nukuriru	残っている
	ぬぶり ¹⁹ 相談(すだん) しーし てい 来どう nuburi su:dan ʃi:ʃitikidu	行って 相談をして来て
	すかはりるさ ²⁰ sukaħarirusa:]	(返事)を聞かせよう
伊武戸	おー ²¹ でいら だんてい ²² ぬぶり [ʔo: dira dandi nuburi	はい では 急いで行って
	相談(すーだん) しーしてい うー り ²³ su:dan ʃi:ʃiti ʔuri	相談をして来られて
	聞(す)かひうりひり sukaħorihiri]	聞かせて下さい
	——加治工幕に入って出てくる——	
加治工	相談(すーだん)ししてい きゃん [su:dan ʃi:ʃiti kjaŋ]	相談をして来たよ
伊武戸	でいら だは ²⁴ 人数(にんじょー) [dira daħa nindʒu:	では 貴方の仲間は
	ぬーでいどう あいうりりゃ ²⁵ nu:didu ʔaio:rirja]	何と言ってらっしゃいますか
加治工	んー だは 人数(にんじゅ)ぬ ²⁶ [ʔm: daħa nindʒunu	おお 貴方たちの仲間は
	出でいき すー しずんどうん やっぺいら ²⁷ ʔidiki su: ʃidzundʒuŋ jattira,	出て来てするつもりならば
	我(ば)な 人数(にんじゅ)ん まー たき ²⁸ bana nindʒum ma:taki	私の仲間も同じように

	出でいき すー しずでい ʔidiki su: ʃidzudi	出て来てするつもりだと
	ていぐみ ^㉑ しーしてい きーる tigumi ʃiʃiti ki:ru]	段取りをして来たよ
伊武戸	さーてい ^㉒ でいら ^㉓ いー ^㉔ 人 数(にんじゅ) [sati dira ʔi: nindzu]	さて ならば十分な人数です
加治工	あい ^㉕ だは せーから [ʔai dahə ʃe:kara だーたんがどう うりくーよー da:taŋgadu ʔuriku:jo:. たるんぬん あうん ^㉖ tarunnun ʔaun つき ^㉗ すーり ^㉘ くんよーさ tsuki suri kunjo:sa]	ああ 貴方の所からは 貴方だけがやって来るのか 誰か連れも 付けて連れて来るだろうね
伊武戸	おー ばな せーから [ʔo: bana ʃe:kara 前元家(まいばにや)ぬ 祖良(すら) maibanjanu sura: ていぐみ しーしてい きーる tigumi ʃiʃiti ki:ru]	はい 私の所からは 前家元の祖良を 段取りして来ています
加治工	さーてい でいら いい にんじゅ [sati dira ʔi: nindzu. ばー ぬぶり すくり ^㉙ まちぶら ば ba: nuburi sʉkuri matʃiburaba だんでい 来(き)ー 呼(やら)び dandi ki: jarabi]	さて ならば十分な人数だ 私は行って準備して待っているから 急いで来て 呼びなさい
伊武戸	おー だー あい にびさり おー る ^㉚ [ʔo: da: ʔai nipisari ʔo:ru ぴとうぬ pitunu,	はい 貴方はあんなに遅い 人でいらっしやいますから

	だんでい すくり まち うーり ぶらな ^㉞ dandi sukuri matʃi ʔuriburana]	急いで準備して待っていらっ しゃらないと
加治工	んー [ʔm:]	ああ
	——加治工先頭に幕に入り、伊武戸、加治工、祖良、加那の順に 出てくる。——	
伊武戸	祖良(すら) くびんな 酒(ぐし) [sura:, kubinna guʃi 入り持ち ʔirimutʃi.	祖良は瓶子に酒を 入れて持ちなさい
	加治工(かざこー) うんな むぬ どう kadzako: ʔunna munudu	鍛冶工はそんな物が
	好(す)きやりうる ゆんから suki jariuru junkara	好きでいらっしゃるから
	持(む)ちうりぶり mutʃiuriburi,	持って行っていなさい
	力(つから)ば つきしみ しみ おーらふ tsikaraba tsikiʃimi ʃimi ʔo:raʔu	力をお付けさせることが
	すずんどうん やっていら sudzundun jattira	できるならば
	人(びとう)ぬ むぬらんま ^㉞ pitunu munuramma	他人の物よりは
	まし たぶりばい ^㉞ maʃi taburibai]	上等に作ってくれるだろう
加治工・加那・祖良		
	あい したぶりばい [ʔai ʃitaburibai]	そのようにしてくれるだろう
	——舞台一巡して——	
加治工	とー くま [to: kuma]	さあ 此処だ

——全員座る——

——祖良は加治工に、加那は伊武戸に——

- | | | |
|-----|---|--|
| 祖良 | くゆなら しじゃ
[kujunara ſidʒa:] | 如何ですか 先輩 |
| 加治工 | ん みしゃんさー
[ʔm: miʃansa:] | ああ 元気かい |
| 加那 | くゆなら しじゃ
[kujunara ſidʒa:] | 如何ですか 先輩 |
| 伊武戸 | ん みしゃんさー
[ʔm: miʃansa:] | ああ 元気かい |
| 加治工 | さーてい きぬりゃ⑫
[sati kɪnurja
かずん しーみらなだら⑬
kadziŋ ʃi:miranadara
加治家(かざや)ん うまん かまん
kadzajan ʔuman kaman
しーりかーりどうる⑭
ʃi:rika:riduru.
弟(うとうどう) 二人(ふたれー)
ʔutudu ʔutare:
つかみしていり
tsikamiʃitiri] | さて 長い間
鍛冶もしてみないものだから
鍛冶屋のここもあそこも
散らかっている
年下の二人は
(塵等を)掴んで捨てる |

加那・祖良

おー [ʔo:]	はい
-------------	----

——全員で掃除のしぐさをする——

——加治工はふいご、ハンマー等を並べる——

- | | | |
|-----|--|------------------------|
| 加治工 | あい 今日や
[ʔai kju:ja
かまま⑮ つくしん⑯ ありどうる
ぬ⑰
kamaxa tsɪkuʃidiŋ ʔaridurunu] | ああ 今日
竈に供える物も有るのだから |
|-----|--|------------------------|

	考(かんが)いぶり むちうりきん よーさ ^④ kangaiburi mutʃiurikinjo:sa}	考えていて持って来て居るだ ろうな
伊武戸	おー さーてい 考(かんが)いぶり [ʔo: sati kangaiburi 持(む)ちうりきーどうる mutʃiuriki:duru.	はい さて 考えていて 持って来て居る
	出(いだ)ひ うしりゃ ^④ 祖良(すら) ʔidai ʔuʃirja sura:}	出して差し上げなさい 祖良
祖良	おー じゅー ^⑤ おいすなら [ʔo: dzu: ʔoisunara] ——茶わん、酒の順に上げる——	はい どうぞ お差し上げい たしましょう
加治工	んー [ʔm:] ——受けとり、酒をついでうやうやしく—— うーとーとう [ʔu: to:tu. 今日(きゅう)ぬ かいびぬ ^⑥ 吉日 (きつにつ)な ^⑦ kju:nu kaibinu kiʃsinitsina: 大(おー)かつ なーかつ ^⑧ ʔo:katsi na:katsi すすさでい ^⑨ うりきば ssadi ʔurikiba おーかま こーかま ^⑩ ʔo:kama ko:kama おーふくいぬまいや ^⑪ ʔo:ʔukinumaija かに いび ^⑫ にはばん ^⑬ kaɲi ʔibi niħabaɲ ぴとういびぬ まま pituibinu mama ふたいびぬ ままがぎ ^⑭ ʔutaibinu mamagagi	ああ おお、尊 今日の良き日 吉日に 大鍛冶 長鍛冶を しようとして来ていますので 大竈 小竈 大ふいご様は 鉄をくべ煮ても(焼いても) 一くべのままで(焼け) 二くべのままで

	あかんだ むつんだぬ ぐとう ʔakanda mutsindanu gutu	赤土 餅土のように
	びきぬばひたぼり とーとう pi ^s kinubaçitabori, to:tu.	引き伸ばして下さい 尊
	あんむつぬ ぱだに ʔammutsinu padani	餡餅の肌のように
	ぴからひたぼり とーとう pi ^s karaçitabori, to:tu.	光らせて下さい 尊
	うーとーとう ʔu: to:tu]	おお、尊
	——金打ち台に三度かけて、のんでから——	
	さーてい 伊武戸 [sa:ti ʔintu	さて 伊武戸よ
	今日(きゅー)や にんずんから どう [㊦] kju:ja nindzucaradu	今日は人数の分も
	ていだい [㊦] うりきーりしてい tidai ʔurikiriçiti]	(奢って)準備して来ているではないか
伊武戸	おー さーてい きゅや にんず んから [ʔo: sa:ti kju:ja nindzucara	はい、扱も今日は人数の分も
	ていだい おりきどうる しじゃー tidai ʔo:rikiduru [idza:]	(奢って)準備しておりますよ 兄上様
加治工	んー [㊦] ん だーん 飲(ぬ)みしてい [ʔm: da:n numiçiti	はい お前も飲んで
	ぱららってい [㊦] まーひひしてい pararatti ma:çitiçiti	ぱーっと(杯を)回して
	ふき うし ʔuki ʔuçi.	ふいごを押しなさい
	弟二人(うとうどうふたれー) ʔutudu ʔutare:	年下の者二人は
	金(かに) 打(うち) kani ʔutçi]	鉄を打ちなさい

- 伊武戸 おー はい
[ʔo:]
- 祖良・加那
おー はい
[ʔo:]
——酒をまわす——
- 加治工 今日や 暑(あつあ)ぬ 裸(ぱた 今日暑くて 裸にならな
が) がい
[ʔkju:ja ʔattsanu padaga
なりどう 仕事(すすさぐ)ん しら いと仕事にならない
りる
naridu ssaguŋ ʃirariru]
——伊武戸あいづちをうち、着物をぬぎ、たすきをする——
- 伊武戸 とー でいら うすんどー さあ では 押しますよ
[to: dira ʔusundo:]
- 加治工 にぴさぬ 遅いくらいだ
[nipisanu]
- 伊武戸 ——ふいごを押しながら——
ぶーばふ[㊤] ぶーばふ ぶーばふ ブーバフ ブーバフ……
ぶーばふ
[bu:baΦu bu:baΦu bu:baΦu
bu:baΦu,
みーだがや[㊤] 未だでしょうか
mi:dagaja]
- 加治工 みーだ みだ 未だ未だ
[mi:da mida
ぬすたる[㊤] 金(かに)ぬどう どのような鉄が
nusutaru kaninudu
あな はいしゃ にーりゃ こんなに早く煮えるものか
ʔana haiʃa nirja]
——伊武戸は「ぶーばふ」をくり返す——
とーとー にゃん にゃん さあさあ 煮えた 煮えた
[to:to: njaŋ njaŋ]

——地謡にあわせて金を打ち、それが終わると加治工と祖良、
加那は……——

祖良・加那

くーにゃん^⑥ くーにゃん
[ku:njaŋ ku:njaŋ]

クーニャン クーニャン

みんぬ^⑧ まーるん ゆがみだつき
んどう
minnu ma:ruŋ jugamidastʃkindu

(鍬の)耳の辺りが歪んでいるので

じょーぶに^⑨ うちたぼんなら し
じゃ
dʒo:buni ʔutʃitabonnara ʃidʒa:]

立派に打って下さいませんか
先輩

加治工 だは あいやなだでいん^⑩
[dahə ʔaijana:dadin]

お前達が言わなくても

しじゃな ちゃんとう みりどう
わーりる
ʃidʒana tʃa:ntu miridu wa:riru]

先輩はちゃんと見ておられる

——水に入れる仕草をし——

ばららー ばふ^⑪
[barara: baɸu]

バララーバフ

——確かめるように見てから——

いー^⑫ まりたる^⑬ かつ^⑭ やっ
さー^⑮
[ʔi: maritaru katsʃi jassa:

おー 立派に生まれた鍛冶(の
品物)であること

とー また うし
to: mata ʔuʃi]

さあ 又 押せ

伊武戸 ぶーばふ ぶーばふ ぶーばふ
[bu:baɸu bu:baɸu bu:baɸu]

ブーバフ ブーバフ……

みーだがや
[mi:dagaja]

未だでしょうか

加治工 みーだ みだ
[mi:da mida]

未だ 未だ

——しばらくしてから——

とーとー にゃん にゃん よしよし 煮えた 煮えた
[to:to: njaŋ njaŋ]

——地謡にあわせて金を打ち、三人で——

くーにゃん くーにゃん クーニャン クーニャン
[ku:njaŋ ku:njaŋ]

祖良・加那

さーてい しじゃ ふつぬ[㊦] まー さて 先輩 口(刃先)の辺が
る
[sa:ti ſidʒa ɸutsũnu ma:rɪŋ]

ゆがみだつきんどう 歪んでいるので
jugamidatsũkindu

じょーぶに 打ちたぶんなら 立派に打って下さいませんか
dʒo:buni ʔutʃitabuŋnara]

加治工 だは あいやなだでいん お前達が言わなくても
[dahə ʔaijanadadiŋ]

しじゃな ちゃんーとう みりどう 先輩はちゃんと見ておられる
わーりる
[ʃidʒana tʃa:ntu miridu wa:rɪru]

——水に入れる仕草——

ばららばふ バララーバフ
[barara: baɸu]

——確かめてから——

いー まりたる かつ やっさ おー 立派に生まれた品物で
あること
[ʔi: maritaru katsũ jassa:]

んー 伊武戸 さー 伊武戸
ʔm: ʔintu:]

伊武戸 あー きさ[㊦] きさ きさ あー 痛 痛 痛
[ʔa: kisa kisa kisa]

——ふりおとして、加治工の耳をつかまえる——

加治工 あが あが あ痛 あ痛
[ʔagaga]

伊武戸 あっつあだら あっつあんでい 熱ければ 熱いと
[ʔattsadara ʔattsandi]

	すかひん おーりどう す sukaçiŋ wa:ridu su.	聞かせて下されば良いのに
	火(ぴい)から むぬば いでひーし てい pi:kara munuba ?idaçiŋiti	火から物を出して
	んーでい とうらひうーるん 'n:di turaçiwa:ru.	ほらと 取らせなさいますか
	あつつあたら 耳 かつまーばどう ㊸のーるでい ?attsadara miŋ katsi:ma:badu no:rudi]	熱ければ耳を搦んだら直ると (言いますので搦みます)
加治工	あが あが あが [?aga ?aga ?aga.	あ痛 あ痛 あ痛
	加治屋(かざや)ぬ むのー kadzajanu munu:	鍛冶屋の物は
	白々(すすい) ぶりどう ss:i:ŋi buridu	(熱い物でも)白々とし
	あいぶるでい㊸ すさぬや ?aiburudi ss:i:sanuja]	っていると 知らないのか
伊武戸	ふん あいどう やりようる [Φu: ?aidu jariu:ru]	ふーん そうでございますか
	——左右にふりながら確かめてから——	
	いー まりたる かつ やっさ [?i: maritaru katsi: jassa:	おー 立派に出来た品物だ
	んー 加那 ?m: kana:]	ほら 加那
加那	おー [?o:]	おー
	——左右にふってみてから——	
	さーてい さーてい まりたる かつ やっさ [sa:ti sa:ti maritaru katsi: jassa:,	さて さて 見事にできた 品物であることだ
	うりがぎどうん やっていら ?urigangidun jattira:	これであれば

	二、三日(にさんにつ)がぎ すー すさぐ nisannitʃigagi su: sʃsagu	二、三日でする仕事であつても
	やらばん 今日(きゆ) 一日(びてい ん)がぎ jarabaŋ kju: pitinʒagi	今日一日で
	すまだぎぱらはりるんがやでい [㊦] 思(うむ)りるんゆ sʃmadagiparaharirunʒajadi ʔumurirunʒu:	してのけることができると 思われますよ
	しかいーとう [㊦] みーぱいゆ [㊦] し じゃ ʃika:itu mi:paiju ʃidʒa}	本当に 有り難うございます 先輩
加治工	んー 君達(だは)ん あい 思(う む)りるんさ [ʔm: dahəŋ ʔai ʔumurirunsa. しじゃなぬ かい きむ入りば [㊦] し ʃidzananu kai kimuiriba ʃi 打ちたぶりりばい [㊦] ʔutʃitaburibai}	おー お前達もそう思うだろ 先輩がこのように心を込めて 打ってくれてあるからな
祖良	——左右にふつて確かめるようにみてから—— さーていさーてい まりたる か つ やっさ [sati sati maritaru katsʃi jassa: くりがぎどうん やつていら kurigaginʒunʒ jattira: 今日(きゆ) 一日(びていん)がぎ すー kju: pitinʒagi su: すさぐ やらばん sʃsagu jarabaŋ 二、三日 かかり すまだぎぱら はりるんがやでい nisannitsʃi kakari sʃmadagipara harirunʒajadi	さて さて 見事にできた品物 であることだ これであれば 今日一日でする ものでも 二、三日かかってしおおせる

	思(うむ)りるんゆ ʔumurirunju.	かなと思われますよ
	しかいーとう みーぱいゆ [ika:itu mi:paiju]	本当に有難うございます
加治工	——ハンマーをふりあげておこり——	
	さーてい ぬーでい あいゆ [㊦] う るざ [㊦] [sa:ti nu:di ʔaiju ʔurudza.	さて 何と言うのだ こいつ
	しじゃなぬ かい あしみずば ながひ [idʒananu kai ʔaʃimidziba nagaçi]	先輩がこんなに汗水を流し
	きむいりば し 打ちうりる kïmuiriba ʃi ʔutʃitabariru	心を込めて打ってある
	道具(どうんぐ)ぬ ふつば dungunu ʔutsiba	道具の口(刃先)を(評するに)
	今日 一日(きゆびていん)がぎ すー kju: pitigagi su:	今日一日でする
	仕事(すさぐ)ん sï:sagun	仕事を
	二、三日 かかりどう す うる ざ nisannitʃi kakaridu su:, ʔurudza.	二、三日もかかってする(と言 うのか)こいつめ
	ばー すぐ かざやぬ かなあい つつ [㊦] ba: sugu kadzajanu kanaaitsitʃi	俺が今 鍛冶屋の金槌を
	うがまひとうらはんば ʔugamaçiturahamba]	拜ませてやろうな
祖良	みなぬ [㊦] いーずぶんま [㊦] [minanu ʔi:dzubumma	今の言い分(言い方)は
	ばんどう ばるはだつきんどう bandu baruhadatsikindu	私が悪うございましたから

	どーでいん ゆるひたぶんなーら しじゃ do:diŋ juruçiatabunnara [iɖʒa]	どうぞ許して下さい 先輩
加治工	ばるはんでい うむりるん [baruhandi ʔumuriruŋ]	悪いと思われるか
祖良	おー [ʔo:]	はい
加治工	しかーいとうゆ [ʃikəi:tuju:]	本当にか
祖良	おー [ʔo:]	はい
加治工	でいら ゆるひたぶるん [dira juruçiataburuŋ]	なら 許してあげよう
伊武戸	さーてい 今日や かずん し [sa:ti kju:ja kadzu:n ʃi: ぶがりん おーりだつきんどう bugariŋ ʔo:ridatsʃikindu ばー 先(まい)なり ぬぶり ba: mainari nuburi 湯(ゆー) 沸(ふ)かひ 待(ま)ちぶら ば ju: ʔukəçi matʃiburaba いきさいぬ ^㊸ みつうどう やり うーる ʔikisainu mitsidu jariuru うーり 茶(ちゃ) ぴとうちゃばん ぬん ʔuri: tʃa pitutʃabanun にきしてい ^㊹ わったら ぬばいどう やりうりゃ ^㊺ nikiʃiti wattara nubaidu jariurja]	さて 今日(けふ)は鍛冶(かじ)もして 疲(つか)れておられるので 私が先(ま)になって行って 湯(ゆ)を沸(ふ)かして待(まち)っているの で 行き(い)がけの道(みち)ですから おいで(おいで)になって お茶(お茶)の一碗(いちばん) でも お上(お上)がりになって行(い)かれたら どう(どう)ですか
加治工	んー あいどう やっすぬ [ʔm: ʔaidu jassunu.]	あーそうであるが

- 今日や かずん し
kju:ja kadzin ſi:
かざやん うまん かまん
kadzaj:n ?umaŋ kamaŋ
しーりかーりだつきんどう
ſirika:ridatsi kindu
ば うまぬ まーるぬ 道具 ぴゅ
んぐば^㉓
ba ?umanu ma:r i nu dungu
pjunguba
しずみまるばひしてい^㉔ くーけ
ſidzumimarubaçiſiti ku:ke:
だーんでい ぬぶり 湯 沸ひ
待ちぶり
dan:di nuburi ju Φukaçi
matſiburi]
- 伊武戸 おー はい
[?o:]
- 三味線に合わせて全員幕内に向かう——
- 伊武戸 かざこー 酔(びー)どうるぬ^㉕ 鍛冶屋さんは酔っておられる
[kadzako: bi:durunu.
みすくみすく^㉖ うとうむさな 注意してお供しないと
[misukumisuku ?utumusana]
- 加治工以外全員退場——
- 加治工 いー ばー 酒(ぐ)せー 残りだつ そうだ 俺の酒は残っている
きんどう^㉗ 飲んまるばへーな^㉘ から 飲み干してしまおう
[?i: ba: guſe: nukuridatsi
kindu nummarubahe:na]
- 三味線に合わせて踊る——
- いー ばー 酒せー 飲みばん おー 俺の酒は 飲んでも
飲みばん 飲んでも
[?i: ba: guſe: numiban numiban
残りぶり ざーぶん^㉙ ざーぶん 残っていて ザブンザブンと
でい
nukuriburi dza:bun dza:bundi

ばー くすなめー ^⑩ ba: kuṣinaṃe:	俺の後ろ辺(背中)を
すぷったらひねーなだつきんどう ^⑪ suputtaraḩine:nadatsikindu	濡らしてしまったから
飲んまるばひしてい ぬぶり nummarubaḩiṣiti nuburi	飲み干してしまって 行って
伊武戸妻(とうず)んがり ʔintu tudziŋgai	伊武戸の妻に(お酒を)
ていだいしみれーなー tidaiṣimire:na:}	奢らせてやろう
——三味線に合わせて踊りながら——	
伊武戸 伊武戸 みなどう ぴー りくーどー {ʔintu: ʔintu: minadu piriku: do:}	伊武戸 伊武戸 今(漸く) 入ってくるぞ

〔語注〕

- ①東大底(あーるすきや)ー演者の屋号を使う。最初の演唱の際、大底氏は「うぶすくやー」(大底家)とした。②しくんがいー仕事。割り当てられた職。③ぶるぬどうー～います。が。「ぬどう」は逆接の助詞。④ていー手。手の代わりを務める物で、道具。⑤みりー見て、即ち、会って。⑥なーていー「なー」は自分自身。銘々。「てい」は手か。⑦かつー数で、それぞれに。あるいは助詞で「～に」か。⑧すずんーことが。「すず」は筋で、こと、つもりの意か。⑨やっぺいらー接続詞。～であったならば。⑩しーぱらりるー「し(為)+ぱらりる(行ける)」で、やっぺいけるの意。⑪えーー感動詞。応答の際に用いられる他、驚きや怒り、不満の表現など様々な場面で使われる。⑫かいー副詞。このように。⑬みしゃんさー「みしゃん」はよい。元気である。「さ」は終助詞で、～かい、～だろうね、の意を表す。⑭かいー⑫の「かい」と同じであるが、ここでは、先に述べた鍛冶工を訪ねる理由を指し、それをすぐあとに述べる展開を導く。⑮あいどう やっすぬーそうであるのだが。「あい」は指示代名詞。そう、そのようである。「どう」は強意の係助詞。国語の「ぞ」にあたり、連体形、名詞で結ぶ。「やっすぬ」は、～であるが。「ぬ」に逆接の働きがある。⑯なーぼーぼーー銘々の仕事場。「ぼー」は仕事場という。方に当たるか。⑰きししていー～してしまって。⑱いいー飯。御飯。ここでは昼の弁当。⑲ぬぶりー上り。ここでは、行っての意。⑳すかはりるさー聞かすことができるよ。即ち、返事できるよ、の意。㉑おーー感動詞。応答の際に用いられる。㉒だんでいー急いで。一刻も早く。㉓うーりーおいでになり、いらっしゃ

り。尊敬動詞。②④だはーあなたたち。二人称の複数を表す。単数は「だー」。②⑤あいー言つて。石垣方言のアンキに対応する。②⑥人数(にんじゅ)ー仲間。組の者。沖縄方言のニンジュ、シンカに同じ。②⑦やっていらー接続詞。～であれば。②⑧まーたきー同じように。同等に。「たき」は丈で、この場合、数量、体積、能力等をいう。②⑨ていぐみー手組み。段取り。③⑩さーていー接続詞。さて。③⑪でいらー接続詞。では。③⑫いーー良い。充分である。③⑬あいー感動詞。あ、おや。③⑭あうー連れ。道連れ。例えば、山に薪を採りにいく時、病人の看護を一晩中する時など、一人で行動するのが心細い時に一緒に行動する連れをいう。多良間方言でアグ。③⑮つきー付けて。③⑯すーりー連れて。沖縄方言のソーティ、石垣方言のサーリに対応する。③⑰すくりー準備し。石垣方言・沖縄方言のシコーリに対応する。③⑱にびさり おーるー遅くいらっしやる。行動がいつも遅れがちでいらっしやる、の意。③⑲ぶらなー～いなくては。～いてほしい。否定の形で願望の意を表している。④⑰らんまー～よりは。比較を表す。④⑱たぶりばいー～してくれるでしょうね。「たぶり」は呉れ、下さり。「ばい」は、～だろうね。推量であるが、推量したことについて、聞き手の同意を求める気持ちがある。④⑲きぬりゃー長いこと。語形としては石垣方言のキノレー(最近。この頃)に対応するが、意味に相違がある。④⑳しーみらなだらーしてみているので。してないので。「みらな」は補助動詞「みる」(見る)の未然形「みら」に打ち消しの助動詞「な」の付いた形で、～みない、～を経験していない、の意。「だら」は接続詞で、～なので、の意を表す。④㉑しーりかーりー散らかって。散乱している状態をいう。④㉒かままー鍛冶屋の窯。材料となる金属を入れて焼くためのもの。④㉓つくしんー置く物も。「つくし」は「つく(置く)+し(もの)」で、置く物。ここでは鍛冶神にお供えする供物。「ん」は「も」で係助詞。④㉔ありどうるぬー「あり(有り)+どう+うる(居る)+むぬ」(有りぞするものを)のつづまった形。有るのだが、無ければならないが、の意。④㉕むちうりきんよーさー持って来ているだろうね。「よーさ」は、～だろうね、の意を表す連語。④㉖うしりゃー差し上げなさい。石垣方言のウサイリヤ、沖縄方言のウサギレーに対応する。④㉗じゅーー感動詞。さあ。どうぞ。目上の人に物を差し出し進める時とか、目上の人を促す時などに用いる。④㉘かいぴー良き日。「かい」は形容詞「かいはーん」(美しい。立派である。良い)の語幹。④㉙なー助詞。～に。ここでは時間を表している。④㉚おーかつ・なーかつー大鍛冶・長鍛冶。鍛冶をを讃えた表現で、立派な鍛冶、即ち、鍛冶が見事に成功するよにとの願望の込められた表現。④㉛すすさでいーしよう。と。「すすさでい」はssadiの表記。ツサは動詞スンの未然形で、志向を表し、～しよう、の意。「でい」は助詞。～と。④㉜おーかま・こーかまー大窯・小窯。鍛冶屋の窯の美称。④㉝おーふくいぬまいー大ふいごの前。ふいごに対する敬称で、ふいごを神として表現したもの。偉大なるふいご様。鍛冶神様。「まい」は、尊敬の意を表す接尾語。④㉞いびーくべ。薪を竈にくべるのにもイビンという。ここでは農具の原材料となる鉄の固まりを窯に入れることをいう。④㉟にはばんー煮ても。ここでは、鉄の固まりを窯で焼いても、の意。石垣方言のネーサ

バンに対応する。⑤ままがぎーままで。「がぎ」は助詞。～で。bo:gagi tataki (棒で叩き)のように、手段も表す。⑥にんずんからどうー人数からぞ、すなわち、人数分を。⑦ていだいー奢り。もてなし。饗応。⑧んー感動詞。はい。目上の者が目下の者に対して、物を進めたり、動作を促したりする時に用いる。⑨ぱららっていー擬態語。動作が勢い良く行われるさまの表現。⑩ぶーばふー擬態・擬声語。ふいごから勢い良く空気が送られていくさまの表現。⑪みーだがやー未だかな。「みーだ」は未だで、石垣方言のメーダ、沖縄方言のナーダに対応する。「がや」は、～だろうかな、の意を表す終助詞。疑問の終助詞「が」に間投助詞「や」の付いたもの。⑫ぬすたるーどのような。いかなる。石垣方言のノースタに語形的には対応する。⑬くーにゃんー語義未詳。この狂言では、金槌を打ち振るいながら言う。⑭みんー耳。ここでは鍬の刃の反対側にある、柄をすげるために付けられた半円形の部分。⑮じょうぶにー立派に。首里方言でも文語で立派、申し分のことをジョーブunという(『沖縄語辞典』参照)。⑯あいやなだでいんー言わなくても。「なだ」は動詞の未然形に付いて、～しなかった、の意を表す。「でいん」は接続助詞。～でも。⑰ばららーばふー擬声語。火のついた薪や赤く焼けた鉄などを水に入れたときにでる音の表現。⑱いー感動詞。ああ。おお。⑲まりたるー生まれた。立派に出来た。⑳かつー鍛冶。ここでは鍛冶でつくり出された品物。㉑やっさー～だわい。㉒ふつー口。ここでは、鍬の刃。鍬の先にあたることからの名であろう。㉓きさー感動詞。あ痛い。熱い物に触れたり、手を何かに打ちつけたり、挟みつけたりなどして強烈な痛みを感じたときに発する。痛いのを大げさに言うときに用いる。アガーよりも強い表現。㉔かつまばーどうー掴まえたらこそ。掴まえたら。㉕白々(すすい)ぶりどう あいぶるでいー白々としていると。白々と居って有り居ると、が直訳。ここでは、白くしているのがあたりまえだよ、くらの表現であろう。㉖すまだぎばらはりるんがやーしのけていけるだろうと。「すまだぎ」は、～しのける、～しおおせる。「ばらはりるん」は、行かせられる、が原意で、～していける。「がや」は前出。～だろうかな。㉗しかーいとうーしかと。まことに。㉘みーぱいゆー有難うございます。石垣方言のニファイユーに対応する。㉙きむ入りー肝入り。心を込めること。㉚うちたぶりりばいー打って下さってあるからな。打ってくれてあるからな。「たぶりり」の後ろの「り」は動詞の連用形について理由を表す。「ばい」は終助詞で、～な。㉛あいゆーいうのか。「ゆ」は、～か、の意。㉜うるざー卑称。こいつ。㉝かなあいつつー金相槌。鍛冶道具の一つで、大型の金槌。㉞みなーいま。石垣・沖縄方言でナマ。㉟いーずぶんー「いずぶん」。言い分。言い方。「ずぶん」の意は不明。㊱いきさいー行きがけ。ついで。ここでは、かえりがけ。㊲にきしていーあがって。ここでは、お茶を飲みになって。石垣方言のンコーリ、多良間島方言のンキャギに対応する。ʔi: niki wari (御飯をお上がりになっていらっしやい) などと使う。㊳ぬばいどうやりうりゃーいかがですか。㊴ぴゅんぐー「どんぐぴゅんぐ」と、畳語として用いられる。語義不明。㊵しずみまるばひしていー片付けてしまって。「まるばひしてい」は、動作が勢い良く行われ

ることをいう補助動詞「まるばす」の接続形。⑨⑤びーどうるぬー酔っていますので。「ぬ」は理由を表す助詞。⑨⑥みすくー用心してゆっくりと。⑨⑦残りだつきんどうー残っているので。「つきんどう」は、～だから、～なのでの意。原因・理由を表す連語。⑨⑧飲んまるばへーなー飲み干してしまおうか。「まるばへー」は前出の「まるばひしてい」の異活用。「な」も前出。～しようか。～か。⑨⑨ざーぶんー擬態・擬声語。水や酒などが瓶などの容器の中で揺れるさまの表現。⑩⑩くすなぬー後ろのあたり。背中への辺り。⑩⑪すぶったらひねーなだつきんどうー濡らしてしまったので。「すぶったらひ」は、ぬらして。「ねーなだ」は、直訳すると、～してない。即ち、～してしまった、の意。

3) 田耕しい (たーかいしい)

総代	我(ば)んどう 古見(くん)ぬ [bandu kunnu	私が古見の
	総代(すーだい)ゆー su:daiju:	総代でございます
	今日から 又 田あるな① すー 時期(ずぶん) kju:kara mata ta:aruna su: dzibun	今日からまた 田の荒打ちを する時期に
	なりだつきんどう naridatsikindu	成りましたので
	我(ばー) 使(つかい)ぬ ba: tsikainu	私の使いの者(使用人)達を
	者(むぬ)達(きゃー)ば 呼び munukja:ba jarabi	呼んで
	田あるな しみるんでい かい あるぐゆ ta:aruna ſimirundi kai ʔaraguju:]	田の荒打ちをさせようと このように歩いています
	——幕内に向かい呼びかける——	
	蒲戸(かまだ) おー [kamada:] [ʔo:]	蒲戸 はい
	津久利(つくりゃ) おー [tsukurja:] [ʔo:]	津久利 はい
	松(まつあ)② おー [matsa:] [ʔo:]	松 はい

	だんてい 出(い)でいきみり [dandi ?idikimiri]	さっさと出て来てごらん
蒲戸・津久利・松	おー くゆーなら あざま③ [?o: kujunara: ?adzama:]	はい 御機嫌いかがですか おじさん
総代	んー みしゃんさー [?m: miʃansa:]	んー 元気だろうね
	だはん 知るとうるなー④ dahān ʃi:urutu:runa:	君達も知っているように
	今日(きゆ)から 又 田あるな すー kju:kara mata ta:aruna su:	今日からまた 田の荒打ちを
	時期(ずぶん) なりだつきんどう dzibun naridatsikindu	する時期に なっているから
	我が 与那田大枡(ゆなだうぶま そー) baga: junada?u:massa:	私の与那田大枡(の田)を
	うり 耕(かいひ)まるばひしてい ?uri kaiçi:marubaçiʃiti	行って ぱっと耕して
	くーよー ku:jo:]	来いな
三人	おー 我な うり⑤ [?o: bana ?uri	はい 私は行って
	じょーぶに 耕ひまるばひしてい djo:buni kaiçiʃiti	立派にぱっと耕して
	くーにら⑥ あざま ku:nara ?adzama:]	来ましょうね おじさん
総代	じょーぶに 耕ひしていくーな [dʒo:buni kaiçiʃitiku:na:	立派にぱっと耕して来いな
	あざまん 昼間(びすま)がい⑦ ?adzama:m piʃimangai	おじさんも昼間には
	まーるまーるし おーるぬ⑧ ma:rima:ri ʃi ?o:runu	廻り廻りして来られるつもり だから

- よー 昼間寝(びすまにび)なだ すーな
jo: pi:sumanibinada suna] いいか 昼寝などするな
- 三人 おー はい
[?o:]
- 総代を先頭に幕内に入る——
- 蒲戸 津久利(つくりゃ) 火種(ぴんどう
ん)⑨ 津久利は火種を
[tsukurja: pindun
つきむち 点けて持ちなさい
tsikimutʃi]
- 津久利 おー はい
[?o:]
- 蒲戸 松(まつあ) ふたでいるな 松は蓋付き籠に
[matsa: Φutadiruna
飯(い) ふない⑩ むち 飯を入れて持ちなさい
?i Φunai mutʃi]
- 松 おー はい
[?o:]
- といいながら、幕の中から出てくる——
- 蒲戸 とー くま 津久利(つくりゃ) さー 此処だ 津久利は
[to: kuma tsukurja:
田(たぬ) 水口(みずふつ)⑩ 田の水口を開けて来い
開きしていく [tanu midziΦutsi ?akiʃitiku:]
- 津久利 おー はい
[?o:]
- 舞台前の方に進み、田の畦を切る仕草——
- だーぶる⑩ だーぶる ダーブル ダーブル
[da:buru da:buru]
- 蒲戸 松(まつあ) ふたでいるん⑩ ぴき 松は蓋付き籠を引き提げよ
さいり [matsa: Φutadirum pikisairi
よー 高々(たかたか) ぴきさうな⑩ いいか 高々と引き提げないと
jo: takataka pikisauna

- うまな 犬(いん)ぬ ざまんぐり^⑮ 此処ら辺に 犬が迷い歩いて
あるきたるぬ いたからな
ʔumana ʔinnu dzamanguri
ʔarukitarunu]
- 松 おー はい
[ʔo:]
- 弁当かごを木にかける——
- 津久利 とー 開きゃん さー あけたぞ
[to: ʔakjan]
- 蒲戸 とー でいら 東あつつあんがい さー では 東の畦に
[to: dira, ʔariʔattsangai]
- 着きあーらしゃーどー^⑯ 着き勝負だぞ
tsikiara(a:do:)]
- 津久利・松
- あいどー そうだぞ
[ʔaido.:]
- 三味線、「いき離れ節」に合わせて耕す——
- 津久利・松
- あー 休(ゆー)くい 休くいどう なる あーあ 休み休みしてしかで
[ʔa: ju:kui jukuidu naru] きない
- 蒲戸 ——すかすように——
- えーえー つまな あったる く おいおい 何処にあった事が
とうぬどう
[ʔe:e: tsuːmana: ʔattaru kutunudu]
- 田(たー)ば ぴとうばかたんが^⑰ 田を一パカ(区画)だけ
ta:ba pitupakatanga
- 耕(かい)ひしてい 耕して
kaiçijiti
- 休(ゆー)どう くーでい^⑱ ありゃ 休むということがあるか
ju:du ku:di ʔarja:]
- 津久利・松
- だーん 休くいーりゃ あんたもお休みなさいよ
[da:ŋ jukuu:rja:]

蒲戸	えーえ めーぴとうきばんな ^⑩ [?e:e me: pitukibanna: きばりしてい kibarijiti 飯(いー)ん 食(ふあ)い ?i:m Φai 煙草(たばぐ)ん 吸(ふ)かぼどう tabagum Φukabadu 美味(まーは)れんゆー maharenju:]	おいおい もう一気張りは 気張って(それからなら) 御飯も食べ 煙草も吸っても 美味しいというものだよ
津久利・松	立ちぶり 飯(いー)ん 食(ふあ)い [tatjiburi ?i:m Φai 煙草(たばぐ)ん 吸(ふ)かばん 美味(まは)ん tabagum Φukabam mahən, とうくーとう ^⑩ 座(び)じぶり tuku:tu biziburi 飯(いー)ん 食(ふあ)い ?i:m Φai 煙草(たばぐ)ん 吸(ふ)かぼどう tabagum Φukabadu 美味(まは)れんゆー maharenju:, だーん 休(い)おーりゃ da:ŋ jukuwarja]	立っていて 御飯を食べ 煙草を吸っても美味しいか ちゃんと座っていて 御飯も食べ 煙草も吸ってこそ 美味しいというものだ あんたも お休みなさいよ
蒲戸	ぴらつかぬ 者達(むんきゃ) 寝(び) しゃーな ^⑩ [piratsikanu munkja: nipi:ana, 我一人(ばーたんが)がぎ 耕(かい) ひまるばひみしらー baxtaŋgagagi kaiçimarubaçimi:jira:]	怠け者達は 寝(び)ていろよ 俺一人で えい 耕(か)してみせ よう
津久利・松	ちー ^⑩ [tji:]	ちー(へへへ)

——「いき離り節」に合わせて蒲戸一人で耕す——

蒲戸 いー^㉔ 木ばいぬ 先(ふつ) ぼるむ おっ 木鋤の刃先を割る物が
 んどう
 [ʔi: ki:painu Φʊts i barumundu
 ありゃんゆー あるよな
 ʔarjaŋju:]

津久利・松

ぴらつか 木ばいぬ 先 ぼりっ 怠け者め 木鋤の刃先を割っ
 しば^㉕ たなら
 [piratsika, ki:painu Φʊtsi ba
 riʃʃiba

明日(あつあ)から 遊ぶんなー^㉖ 明日からは 遊ぶのかい
 ʔatsakara ʔasapʊnna:]

蒲戸 えーえ^㉗ くまな 抱ぎばん 抱が
 るぬ おー おー 此処には抱いて
 も 抱けない
 [ʔe:e kʊmana: dagiban dagarunu

大石(うぶいし)ぬ ありば 大石があるから
 ʔubuiʃinu ʔariba

我が 三人(みすたん)なるがぎ 俺たち三人で
 бага misitannarigagi

出(いだ)ひ捨(し)ていでいら ぬば 出して捨ててしまおうよ
 いらー^㉘
 ʔidaçʃʃitidira nubairja:]

津久利・松

あつたるむのー^㉙ だー 物(むぬ) そんな物は あんたの物だ
 どう
 [ʔattarumuno: da: munudu

やる
 jaru.

だー 出(いだ)ひ 捨ていらや あんたが出して捨てなさい
 da: ʔidaçʃʃitirja]

蒲戸 ぴらつかぬ 者達(むぬきゃー) 怠け者達は 寝ているよ
 寝びいしゃなー
 [piratsikanu munukja: nipiʃana:,

- うりん 我たんががぎ 出ひみし これも俺一人で出して見せよ
ら
?urim ba:tangagagi ?idaçimi
[ira]
- 津久利・松
- あっぱ まいちゃん だー たま お母さんの下履きもあんたの
すどー ものだよ
[?appa: maitʃan da: tamasi
do:]
- 蒲戸 ——「いき離り節」にあわせて石を取り除きにかかる。石を動かす
動作をして——
- みーだ 動(うが)ぬばんゆ 未だ動かないことよ
[mi:da ?uganubanju:]
- 津久利・松
- みーだ 動ぬでい あいやんなー 未だ動かないということがあ
[mi:da ?uganudi ?aijanna:] るものか
- 蒲戸 ——三味線の終わる頃、石を取り除く動作。勢い余って、ひっくり
返る——
- 田(たー)ぬ み中(なか)な 転びせ 田の真ん中に転んでしまった
んゆ よ
[ta:nu minakana kurubiʃenju:]
- 津久利・松
- うぬ ぴらつか 田ぬ み中な 怠け者め 田の真ん中に転ん
転び で
[?unu piratsika: ta:nu mina-
kana: kurubi
- 人ぱつかはー[㊟] 人に笑われるよ
pitupatsikaha:]
- 蒲戸 ——掘り出した石を洗う——
- 津久利・松
- くぬ ふりむのー 石(いし)でい この馬鹿は 石だと
[kunu purimuno: ?iʃidi
- 出(いだ)ひしてい 出して
?idaçijiti

	何(ぬー)どう 洗(あら)いりゃ nu:du ?arairja]	何を洗っているか
蒲戸	——洗った石を確かめるように見て、驚きの表情で いー 石でい 出(いだ)したら [?i: ?iʃidi ?idaʃitara 黄金(くがに)ゆん kugani juŋ]	おーっ 石だと出してみたら 黄金だ
津久利・松	えー ^㊸ 黄金(くがに)でいら [?e: kuganidira, 三人(みすたん)なりぬ むぬどう やる misitannarinu munudu jaru]	えー なにっ 黄金だと (これは)三人の物だ
	——と言いながら蒲戸の〔方へ〕 起き上がって寄る——	
蒲戸	えーえ つまな あったる くとう ぬどう [?e:e: tsimana: ?attaru kutunudu くまな 抱ぎばん 抱がるぬ kumana dagiban dagarunu 大石(うぶいし)ぬ ありば ?ubuiʃinu ?ariba 三人(みすたん)なりがぎ 出(いだ) ひ misitannarigagi ?idaçi 捨(してい)らでい あいば ʃitiradi ?aiba あったる むのー だー むんどう やる ?attaru muno: da: munudu jaru だー 出(いだ)ひ 捨(してい)りゃ でい da: ?idaçi ʃitiridi あいしてい ?aiʃiti	おいおい 何処にあった事が 此処に 抱いても抱けない 大石があるから 三人で出して 捨てようと言ったら そんな物はお前の物だ お前が出して捨てろと 言って

	ばー 出(いだ)ひうったら⑩ ba: ?idaçuttara	俺が出したら
	三人(みすたん)なりぬ 物(むぬ) どう やる misitannarinu munudu jaru, うるぎ ?uruza:}	三人の物だ(と言うのか) この野郎
津久利・松		
	きさから⑫ だー 出(いだ)ひ [kɪsakara da: ?idaçɪ 捨(してい)りでい あいだろ ʃitiridi ?aidaro:}	さっきから あんたが出して 捨てるよ 言っていたよ
蒲戸	えーえ くまな 我が 三人(みす たん)なるがぎ [?e:ɛ kɪmana: baga misitan narigagi 言(いー)くんなしー⑬ ならなだつい きんどうな ?i:kunna ʃi: naranadatsikinduna 登(ぬぶ)り 総代ぬ あざま くゆ み nuburi su:dainu ?adzama kɪjumi 総代ぬ あざまんがい⑭ su:dainu ?adzamaŋgai かたずきしみだら ぬばいりゃ katadzukiʃimidara nubairja}	おいおい 此処で俺たち三人 で 言い合いをしてもどうしよう もないから もう 行って 総代のおじさんを訪 ねて 総代のおじさんに 片付けさせてはどうだろう
津久利・松		
	あいしん みしゃどうる [?ai ʃim miʃaduru]	それでもいいさ
蒲戸	あいし みしゃんでい 思(うむ)りるん [?aiʃi miʃandi ?umuriruŋ]	それでいいと思うか
津久利・松		
	んー [?m:]	んー

- 蒲戸 ぴらつかぬ 者達(むぬきや) 怠け者達は
 [piratsi+kanu munkja: 後ろから来いよな
 後(あとう)から 来(く)わーな ?atukara kwa:na:]
- 津久利・松
 あいや ならぬ そうは出来ない
 [ʔaija: naranu]
- 三人、舞台をまわり、上手の方に向かい——
- 三人 あざまー あざまー おじさん おじさん
 [ʔadzama: adzama:]
- 総代 えー きいばりしてい きゃん おーっ 気張って来たか
 [ʔe: kibariʃiti kjan]
- 三人 おー はい
 [ʔo:]
- 松 田(たー) 耕(かい)ひたら 黄金(く がに) 田を耕していたら 黄金を
 [ta: kaiʃitara kugani 探しました おじさん
 とうみんゆー あざま tuminju: ʔadzama]
- 総代 ふんー だはんがら[㊦] 黄金(くが に)ぬ ふん お前達にも黄金が
 [ʔu:ŋ dahŋgara kuganinu 探せるといふことが有るのか
 とうみらりでい ありゆー tuminraridi ʔariju:]
- 蒲戸 田 耕ひしたら 黄金 とうみん 田を耕していたら 黄金を探
 ゆー しました
 [ta: kaiʃitara kugani tuminju: おじさん
 あざま ʔadzama]
- 総代 くれー 正事(しょーくとう)どう これは 本当の事かい
 やる [kure: ʃo:kutudu jaru:]

——総代、黄金を受け取り確かめるように見て、驚いたように——

	いー くれー しょー黄金(くがに) どう [?i: kure: ʃo:kuganidu やりしってい jariʃiti 誰(たる)なーどう あたりだら taʃunadu ?ataridara]	おーっ これは 本物の黄金 であるよな(驚きだ) 誰が(この黄金に)当たった
松	我(ばぬ)なーどう あたりだるゆー あざま [banunadu ?ataridaruju: ?adzama]	私めが当たっております おじさん
津久利	三人(みすたん)なるがぎどう [misitannarigagidu とうみるゆー あざま tuimiruju: ?adzama]	三人で 探しました おじさん
蒲戸	我んどう とうみるゆ あざま [bandu tuimiruju ?adzama]	私が探しました おじさん
総代	えー だは あい 言くんなし [?e: dahə ?ai ?i:kunna ʃi ならなだつきんどうなー naranadatsikinduna:, 年(とうすい)さんかたし [㊦] tusisankata: ʃi: 年上(とうすいしじゃ)んがい tusiʃidʒaŋgai かたずきしみだら ぬばいりゃ katadzukiʃimidara nubairja]	ああ お前達は こんなに 言い合ってならないから も う 年の計算をして 年長の方に 片付けさせたらどうか
三人	おー どーでいん あいしたぶら ならー [?o: do:din ?ai ʃitabunnara:, あざま ?adzama]	はい どうぞ そうして下さい おじさん
総代	あいしん みしゃんでい 思(うむ) りるん [?ai ʃim miʃandi ?umurirun]	そんなにしていると思うか

三人	おー [ʔo:]	はい
総代	でいら 松(まつあ) 何才(いくつ) なるん [dira matsa: ʔikutsi narun]	それでは 松は幾つになる
松	おー 我ぬにーら あざま [ʔo: banu nira ʔadzama:] 我ー 年(とうっ)さ 此(く)ぬ島 (すいま)ぬ ba: tussa: kunu sīmanu 茶碗(ちゃばん)ぬ ぴていつつ tʃabannu pitidzi 満(み)つあぬ けーから㊸ mitsanu ke:kara 生りどうるゆー あざま mariduruju: ʔadzama:]	はい 私ですか おじさん 私の歳は この島が 茶碗の一つにも 満たない時から 生まれておりました おじさん
総代	ふーん だー やらびがやで 思 いば [ʔu:n da: jarabigajadi ʔumūiba 老人(ういびとう)ゆんなー 松(ま つあ) ʔuipitu junna: matsa:]	ふん お前は子供かと思っ たら 年寄りだなあ 松よ
松	——誇らしげに—— おー [ʔo:]	はい
総代	津久利(つくりゃー)さー㊸ [tsikurja:sa]	津久利は(どうだ)
津久利	おー 我ぬにーら あざま [ʔo: banunira ʔadzama:, 我(ばー) 年(とうっ)さ 此(く)ぬ 島ぬ ba: tussa: kunu sīmanu 天(ていん)とう 地(ずい)とうー みーだ ti:ntu dzi:tu mi:da	はい 私ですか おじさん 私の歳は この島が 天と地とが未だ

- ばがらぬ けーから[㊦] 分かれぬ時から
 bagaranu kekara
 生りどうるゆー あざま 生まれておりました おじさ
 mariduruju: ?adzama:] ん
 ——と、これも誇らしげな表情をする——
- 総代 ふーん だー ゆくぬ ふん お前は 更に
 [Φu:n da: jukunu
 老人(ういびとう)ゆんなー 津久利 年寄りだなあ 津久利よ
 (つくりゃ)
 ?uiΦitu junna: tsikurja:]
- 津久利 ——あたかも黄金は自分の物と言わんばかりに——
 おー はい
 [?o:]
- 総代 蒲戸(かまだー)さ 蒲戸は(どうだ)
 [kamada:sa:]
- 蒲戸 ——静かに——
 おー 我ぬにーら あざま はい 私ですか おじさん
 [?o: banunira ?adzama:,
 我(ばー) 嫡子(ちゃくっさー) 私の嫡子は
 ba: tjakussa:
 くいした[㊦] 二人(ふたるっ)とう こいつら二人と
 kuſita Φutarittu
 とうすぬ人(びとう)ゆー[㊦] あざま 同じ歳の人でございます
 tusinu pituju: ?adzama]
- 総代 ふーん だー 親(うや)だぎぬ ふーん お前は(この二人の)親
 [Φu:n da: ?ujadaginu ほどの
 兄(しじゃ)どう やりしってい 先輩であるんだなあ
 ſidzadu jariſiti,
 くぬ 黄金(くがねー) だー 物 この黄金は お前の物だ
 どう やる
 kuſinu kugane: da: mundu jaru
 弟達(うとうどうきゃ)んかい ばが 後輩達に奪われるなよ
 ひなよー
 ?utudukjangai bagaçinajo:]

——と、蒲戸に黄金をわたして退場——

蒲戸	おー 黄金(くがに)んー いーりしば [?o: kuganiŋ ?iriŋiba piraɸkane 者(むぬ)きゃー piratsikanu munukja:]	おー 黄金も貰ったから 怠け者達は 後から来いな
	後から 来(くわー)なー [atukara kwa:na:]	
	——蒲戸も退場——	

津久利・松

	あいやならぬ [?aija naranu]	そうは出来ない
--	--------------------------	---------

——先に帰ろうとする津久利を——

松	えーえー 此処(くま) 出来(いで き)みり [?e:e: kuma ?idikimiri]	おいおい 此処に出て来てみ ろ
---	--	--------------------

——と、引きずり出して——

	だぬんざぬどう 休(ゆー)く 休 (ゆー)くでい [danunzaddu ju:ku ju:kudi]	お前めが 休め 休めと
--	---	-------------

	言(あい)ぶり 我(ば)ぬまでい [aiburi banumadi]	言って 俺まで
--	---------------------------------------	---------

	休(ゆー)くひ ju:kuçi	休んで
--	--------------------	-----

	黄金(くがに) いーらぬさ うるざ kugani ?i:ranusa ?urudza:]	黄金を儲けさせないで こいつ
--	---	----------------

津久利	ぬー うるざ だぬんざぬ [nu: ?urudza: danundzanu]	なにを こいつ お前めが
-----	---	--------------

	休(ゆー)くいだらどう ju:kuidaradu	休んでいたから
--	-----------------------------	---------

	我(ばぬ)ん 休(ゆ)くいおーったる banuŋ jukuiuttaru,	俺も休んでいたのだ
--	--	-----------

	我(ばー) すぐ 下腹(すたばだ) ba: sugu sitabada	俺が 今 下腹を
--	--	----------

きりとうらはんば④
kiriŋturhamba:]

蹴ってやろうか

——と、松を蹴る。松は津久利の足を引いて幕内に入る——

津久利 えー 待(ま)ち 待(ま)ち
[ʔe: matʃi matʃi]

おい 待て待て

〔語注〕

①田あるな—田の荒起こし。田植えのための田打ちで、最初のもの。二度目をマトウナという。三度程打つが、回数を重ねるほど実りが良いという。②蒲戸・津久利・松—これらの名前は出演者の名によって変わる。③あざま—おじさん。縁者、非縁者を問わず言う。④知るとうるな—知っているとおりに。「な」は、～に。⑤うり—下り。ここでは、行って。⑥く—にら—来ましようね。「にら」は、～ましようね、の意。語形的には石垣方言のネーラに対応するようだが、意味的にはずれがあるようである。⑦がい—助詞。～に。～には。⑧おーるぬ—いらっしゃるので。「おーる」は、いらっしゃる、おいでになる。「ぬ」は原因・理由を表す助詞。ここでは、来るので、の意。いわゆる自称敬語である。自称敬語は古見の狂言に時々みられるものである。⑨火種(びんどうん)—畑や山に出る時に持って行く。火持ちの良い木やフガラ(クロツグの皮の繊維)を縄になってそれを芯とした。⑩ふない—よそって。弁当を詰めて。⑪水口(みずふつい)—畦の一部を水落としの為に切って、捌け口としたもの。⑫だーぶる—擬声語。「水口」を切るために振るう鍬のたてる音の表現。⑬ふたでいる—蓋付きの籠。弁当などを入れる。⑭びきさうな—引き提げないといけないよ。「な」は、本来、打ち消しの意を表すが、ここでは「～ないといけない」と軽い命令の意となっている。⑮ざまんぐり—うろうろして。うろついて。石垣方言のザマンドゥルン(さ迷う)に対応する。⑯着きあ—らしゃーどー—着き勝負だぞ。「あーらしゃー」は勝負、競争。ここでは、西の畦から東の畦まで誰が早く田を打ち終えるか競争だ、の意。⑰びとうばかたんが—一区画だけ。「ばか」は、ここでは一人が田を打ち進む約1メートル20センチほどの幅をいう。大人が鍬を右、左の手に持ち替えて耕せる程度の幅という。「たんが」は助詞で、～だけ。⑱休どう く—でい—「ゆーくい」(休み)を「ゆー」「くい」と分解し、それに「どう」と「でい」をつけたもの、という。普通は使わない。⑲きばんな—気張りは。頑張りは。「きばん+や」の変化した形。⑳とうく—とう—ゆっくりと。ゆるりと。国語の「とくと」に対応する。㉑寝びしゃーな—寝てしまえ。「な」は強意の終助詞。㉒ち—感動詞。人をけしかける時に用いる。ここでは、頑張れくらいの意。動物(牛馬など)をけしかける時にはhija:という。㉓い—感動詞。おお。ああ。㉔ばりっしば—割ったので。「ば」は確定条件を表

す接続助詞。②⑤遊ぶんなー遊ぶね。ここでは「遊ぶことだね、あんたは」という程度の意。②⑥えーえー感動詞。おいおい。呼び掛けの語。後ろの方は、「何だと」くらいの意。ここでは怒気を含んだものとなっている。②⑦捨(し)ていでいらぬばいりゃー捨ててはどうか。捨てようではないか。「でいら」は、～しては。「ぬばいりゃー」は、～如何かの意。後ろにも「～しみだらぬばいりゃ」(～せしめたらどうだろうか)とでる。②⑧あつたるむのー当たったものは。「むのー」は「むぬ+や」の変化した形。②⑨人ぱつかはー恥ずかしい。一般には「ぱつかはー」だけでいいが、「人」をつけたのは、人に見られて恥ずかしい、と強調するためか。③⑩えー感動詞。おお。驚きの声。③⑪出(いだ)ひうつたらーお出しになりましたら。自称敬語で、自身の行為を自慢した表現である。③⑫きさからー最初から。「きさ」は、確定している過去の一時点を言い、不確定な過去の時間は言わないという。石垣・沖縄方言のキサ、キッサに対応する語。③⑬言(い)くんなー言い合い。「くんな」は対決、闘いの意を表す接尾語。石垣方言のクナーに対応する。③⑭がいー助詞。～に。③⑮がらー助詞。～にも。③⑯さんかたー算方。計算。ここでは、年を数えてほどの意。③⑰茶碗ぬ〜茶碗一つに満たない、茶碗の中にすっぽりに入る、すなわち、茶碗程の大きさもない。島は成長し大きくなるという想念のあることがわかる。③⑱津久利(つくりゃー)さー津久利よ。「さー」は、ここでは「(おまえは)どうだ」「(お前の)番だ」という意をあらわしている。③⑲天(てーん)とう地(ずいー)とう〜大底氏は、天と地とが未だ分からない、すなわち天と地とが不分明の時の意であろうか、とするが、あるいはここは、天と地とがまだ分かれぬ時をいうかとも思われる。もしそうであれば、『古事記』の「天地初発之時」という想念と重なるものであり、宇宙の起源を語る神話の断片と目され、貴重である。④⑰くいしたーこいつ達。こいつら。ここでは、津久利と松。④⑱とうすぬ人(びとう)ー一年の人。同じ年の人。同年の人。④⑲きりとうらはんばー直訳すると、蹴って取らせてやろうぞ。蹴りとばしてやろうか。

4) 亀組

——三味線の伴奏があって、頭大主、出てくる——

頭大主 ほー 今日(ちゅう) 来(ちゃ)る ほー 出て来た者は
[ho:ɔ: tʃu: tʃaru

者(むぬ)や① 頭大主(かしらうふ 頭大主
ぬし)

munuja kaʃiraʔuɸunuʃi.

今日ぬ 良かる 日に 今日の良い日に
kju:nu jukaru çini

今日ぬ まさる 日に
kju:nu masaru çini

照る 太陽ん ちゅらさ
tiru tidan tçurasa

押す 風ん しださ
?usu kadçin řidasa

かしら浜 うりてい
kařirahama ?uriti

魚ゆ 釣らにわ しまん
?ijuju tsuraniwa řimaŋ]

——三味線伴奏が入り、頭、浜に向かう——

ほー 頭浜ていすや
[ho:õ: kařirahamatisuja

くまどう やっさみ
kumadu jassami.

なまぬ 時ん 足 ゆどうでい②
namanu tutřiŋ ?aři jududi

魚(いゆ)ゆ 釣らにわ しまん
?ijuju tsuraniwa řimaŋ]

——亀が釣れる——

ほー 魚でい 釣りば
[ho:õ: ?ijudi tsuriba

亀ぬ くあいみせん
kaminu kwaimiřeŋ.

なまぬ 時(とうち)ん
namanu tutřiŋ

足早(あしはや)みてい
?aři hajamiti

亀 けーさにわ③ しまん
kami ke:saniwa řimaŋ]

——幕中から女神が現れる——

いえー 女(いなぐ) いちやる
[?e: 'winagu ?itřaru

今日の勝る日に

照る太陽も心地良く

吹く風も涼しい(ので)

カシラ浜に 下りて

魚を釣らないではいられない

ほー カシラ浜というのは

此処であるぞ

今は 足を止めて(留まって)

魚を釣らないではいられない

ほー 魚だと釣れば

亀が食いついて来られた

今の時は

足を早めて(急いで)

亀を返(帰)さないといけない

おい 女子よ 如何なる

	事(くとう) あていどう kutu ?atidu	事(理由)があって
	くまに うたが kumani ?utaga]	此処に居たのだ
女神	よーよー 我みや くぬ 島(しま)ぬ [jo:jo: wamija kunu ſimanu 者(むぬ)ん あらん munuŋ ?araŋ 世間(しけー)ぬ 者(むぬ)ん あらん ſike:nu munuŋ ?araŋ みなや島④ぶいうじ神(がみ)ていす や minajadzimabui?udzigami tisuja 我みどう やゆる wami:du jajuru]	いいか 私は この島の 者ではないぞ この世の者でもないぞ ミナヤ島ブイウジ神というの は 私であるのだ
頭大主	ほー みなや島(じま)ぶいうじ神 (がみ)ていすや [ho:o: minajadzimabui?udziga mi tisuja いちやる 事(くとう) あていどう ?itſaru kutu ?atidu わか なに⑤ うくよーが⑥ waka nani ?ukujo:ga]	ほー ミナヤ島ブイウジ神と いうのは 如何なるわけがあって 私の縄(釣り糸)に掛かって こられたのです
女神	くぬしけに んじる [kunu ſike:ni ?ndziru くぬかわに んじる kunu kawani ?ndziru みりく世(ゆ)ぬ 主(ぬす)でむぬ mirikujunu nusidemunu なうる世ぬ 主でむぬ naurujunu nusidemunu みりく世ば むちゃい mirikujuba mutſai	此の世界に出る 此の地上に出る 弥勒世の主であるから 稔り世の主であるから 弥勒世を持って

	なうる世ば むちゃい naurujuba mutʃai	稔り世を持って
	物種子(むぬだに)ゆ 譲(ゆじ)ら munudaniju judzira	物種子を譲ろう
	米種子(くみだに)ゆ 取(とう)らさ kumidaniju turasa]	米種子を取らせよう
頭大主	うーとーとう [ʔu: to:tu	おお 尊
女神	夏水(なつみず)に うるし [natsumidzuni ʔuruʃi	夏水に下ろし
	冬水(ふゆみず)に 植(い)びより ʔujumidzuni ʔibjo:ri	冬水にお植えなさい
	やいに世ぬ なうり jainijunu nauri	来年の年の稔りは
	来夏世(くなつゆ)ぬ みきり kunatsijunu mikiri	来夏世の実りは
	首里天(すゆいていん)じゃなし前(め) に sujuitindzanaʃimeni	首里の国王様に
	御初俵(うはちだーら) 上(あ)ぎてい ʔuhatsida:ra ʔagiti	御初の俵を上げて
	拝(うが)でい しでいる⑦ ʔuga:di ʃidiru]	無上の喜びとなる
頭大主	うーとーとう [ʔu: to:tu	おお 尊
	今日ぬ うりしさや kju:nu ʔuriʃisaja	今日の嬉しさは
	たている くとうん ならぬ tatiru kutun naranu	譬える事もできない
	浜(はま)ぬ まさぐ hamanu masagu.	(その喜びは)浜の真砂(のようで 無上である)
	我みん うとうむ からまぎてい⑧ wamiŋ ʔutumu karamagiti	私もお供を勤めて

踊(うどう)てい 戻(むどう)てい 踊って 戻って行こうよ
 いこーや
 wuduti muduti ?ikoja]

——イキバナリ節に合わせて女神の後から踊りながら退場——

〔語注〕

- ①今日(ちゅう)来(ちゃ)る者(むぬ)ーや語に忠実に訳すると「今日来た者は」となるが、この句は、組踊の冒頭に登場する人物がかたる常套句「出様ちやる者や」(でいよーちやるむぬや=今、登場した者は)の変化したもの。②ゆどうでいー淀んで。足をとめて。③けーさにわーひっくりかえさねば。あるいは「海に帰さねば」かとも思われるが、大底氏によると、この句は怒った様子で演ずるので、前者と思われる、という。④みなや島ーどこの島の名か不詳。「みなや」は他界・ニライカナイのニライの変化した形と思われる。女神は海中の他界「みなや島」から五穀の種子を携えて、古見に豊饒をもたらすために来たということからすると、「みなや島」はニライ島とみてよいだろう。⑤わかなー我が縄、即ち、自分の釣り糸。⑥うくよーがー食うか。ここでは、魚が餌に食いつき、釣針にかかることをいう。⑦しでいるー瞬で。生まれ変わる。転じて、生まれ変わる程の幸せを喜び祝うの意となる。⑧からまぎていー勤めて。沖縄方言のガラミチュンに対応する。

注

- 注1 拙稿「八重山の風土・歴史・文化」(『沖縄芸術の科学』第2号 1989年3月)参照。
 注2 森田孫栄氏によると、八重山ではニサイキャハン(二才脚半)と称するという。

〈付記〉

本稿は大底朝要氏の御協力によって成ったものである。記して感謝の意を表したい。

なお、本稿は『沖縄芸術の科学』(第7号)に発表した「古見の結願祭と狂言」を底稿としている。大底朝要氏作成の狂言詞章集「古見の狂言」と、それを大底氏自身が朗読した「朗読詞章」の音声表記を並掲したが、その際、「古見の狂言」の詞章と「朗読詞章」との間に生じた異同についてはそのままにしてある。この点につい

ては大底氏自身が、「古見の狂言」が自分自身のための備忘用であり、実際のものとの間に異同のあることを自覚しておられること、そして、自分以外の演者の持っている詞章とつきあわせる必要のあることを言っておられることから、あえて異同のあるままにしておいた。また、「古見の狂言」の詞章を朗読の際に改めた部分については、本稿ではそれに従って改めたこともあわせて断っておく。

音声表記については上原孝三氏（琉球大学非常勤講師）の助言を得た。記して感謝申し上げます。